

MINAMI KYUSYU NO JOKAKU

南九州の城郭

第15号 #
南九州城郭談話会報 #
平成12(2000)年8月10日発行 #
#####

中世佐敷城を探る（後編）

鶴嶋俊彦

5 「佐敷東の城」の城郭遺構

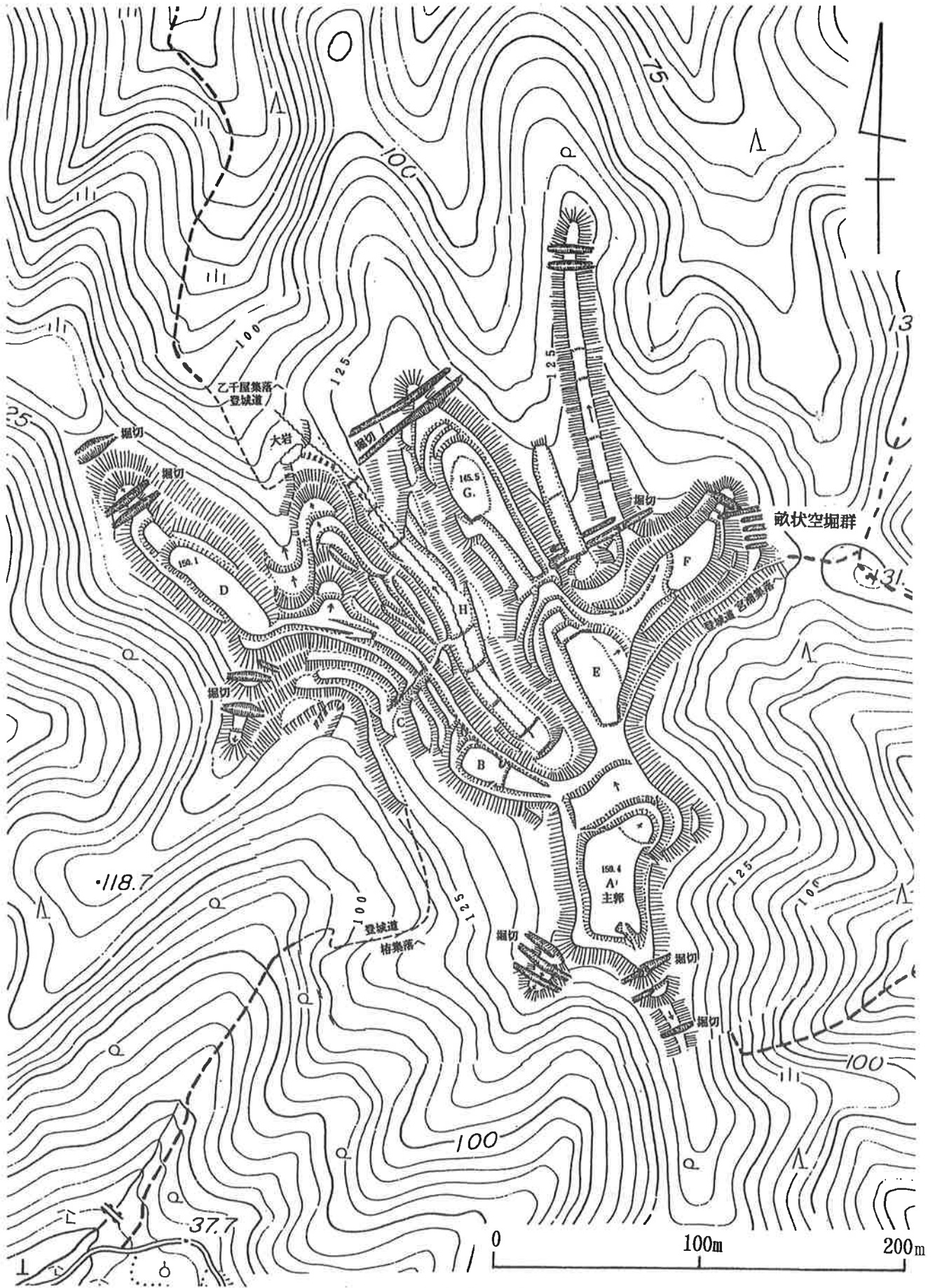
佐敷川の北側には支流の宮浦川と乙千屋川に挟まれた標高350m前後の山地がある。その山地が佐敷川に落ち込む標高159.4mの支峯付近が城地で、城地は現在は「じょうやま」と呼称されている。南東～北西の主軸の尾根が600m連続し、北東側の山地とは浸食谷によって区切られた独立的な山丘状をなしている。城跡一帯の地形は斜面の浸食が大きく急斜面を形成し、天然の要害を形成する。

城跡南西麓に「柵(かこい)」集落があり、城跡への登山道がある。他の事例と同様に城跡と関連する麓集落と考えられる。その近辺の麓に相良氏によって開基された「佐敷諏訪神社」が鎮座し、天文年間に人吉永国寺の僧によって開基されたと伝わる東泉寺跡がある。『清正勲績考』には「山上に城アリ、四方險阻ニシテ東泉寺ヨリ九折ノ内道ヲ登ル城ナレハ、人数ヲ以て攻取ントセバ要害堅固ニシテ容易に破り難カルベキ」とあり、麓の柵集落の奥詰めの東泉寺からの登城道の存在が知られる。

さて、踏査によって確認された城郭遺構は、城跡中最高峰の支峯とここから北方に派生する2本の尾根上と山腹・迫地に展開する堀切群・曲輪群によって構成されている。こうした堀切と曲輪の配置によって縄張りを巨視的に区

分すれば、最高所の支峯にあるA曲輪群（「一の丸」と伝承される）、A曲輪群の北西側の派生尾根途中にあるB曲輪群（「二の丸」とその尾根先端の標高151.1メートルの峯にあるD曲輪群（「三の丸」）、B・D曲輪群の中間の西側斜面の階段状のC曲輪群、また、A曲輪群から北方の派生尾根にあるE曲輪群とその先端尾根のF曲輪群、E曲輪群から北西に派生した尾根上にあるG曲輪群、さらにB・C・DとE・Gの曲輪群（尾根）に挟まれた迫地に築かれたH曲輪群の8箇所曲輪群に大別できる。

佐敷東の城の遺構の特徴は、支点となる主郭から馬蹄形に開いた尾根地形を利用し、その間の迫地に至るまで殆ど隙間なく曲輪として加工して広大な居住空間と防御空間を確保し、外縁を多重の堀切群で厳重に防御している点にある。ここに長期の籠城にも耐えうる当地域の中核の城郭として普請を行った築城者側の地域支配への強い意図が読み取れる。各曲輪群の主曲輪面は城外に面して帯曲輪や多重の堀切で防御されるが、堀切と堅堀、切岸を組み合わせた構造が随所にあり、また、長大な堅堀を兼ねた堀切によって城域を限り、人吉城に続いて県内では二例目となる畝状空堀群をF曲輪群の東山腹に一部導入しているなど、



第3図 佐敷東の城縄張図

特徴的な防御方法をもつことが指摘できる。しかし、各曲輪群間には堀切や虎口などの区画施設がなく、各々の曲輪群は城内道で簡単に連絡できる構造となっている。また、三つの登城道が主郭近くに到達できる構造となっているなど、求心的な構造ではなく基本的には各々独立的な防御を行う曲輪の集合体となっており、虎口の構造も発達したものはみられない。

縄張り全体の構造からすると北側に開いた迫地を内包した馬蹄形の尾根上に占地しており、その最奥部分の最高所となる支峯に主郭が置かれている。この縄張りから考えられる城の大手（正面）は北麓の乙千屋集落方面とみるのが順当であろう。乙千屋（おとじや）の地名由来は、城主東藤左衛門の子供の「乙千代丸」の居住によると『肥後国誌』は伝えている。佐敷東の城の構造から北麓の乙千屋の集落は大手口となる可能性が高い。「おとじ」の語源を「大刀自」（おおとじ）とすれば、「とじ」が戸口にいて一戸の出入りを支配した戸主（とぬし）を意味する古語でもあることから、佐敷東の城の城主（城代）の屋敷や一族の屋敷が乙千屋にあったことを示唆するものであろう。

なお、主郭に鎮座する山の神は後年に細川氏によって大関山（水俣市・芦北町境の山）山頂の神社を分神させられたもので、山麓の乙千屋・楯・宮浦（現在は乙千屋・花岡北・花岡東・諏訪・宮浦の五地区）の住民によって祭祀されており、祭日には住民が山頂の一の丸に集まり、酒肴を交え子供相撲を行う行事が残る。こうした行事は山城の麓に居住した武士や農民が非常時において防戦や逃げ込み城として利用するなど、山城と城下の家臣・農民との強い係わり方を示唆するものと考えられる。乙千屋・楯・宮浦はそれぞれ佐敷東の城の登城道の登り口に位置する集落であり、この三地区に家臣団としての佐敷衆が分散し

居住したことを暗示する。

6 佐敷の歴史地理的環境

佐敷は古代の駅が置かれたように、八代と人吉・薩摩・大隅を結ぶ陸上交通の要衝である。近世の薩摩街道は佐敷峠を越えて南下すると尾根づたいに下り道河内の船津橋で乙千屋川を渡河し、佐敷川右岸を通り相逢橋で佐敷川を渡河し左岸の佐敷の町を経て、五本松の谷を上り峠を越えて、湯治坂を下り湯浦に至るルートとされる（『熊本県歴史の道調査』薩摩街道 熊本県教育委員会 1983）。しかし、このルートは加藤氏の佐敷城築城に伴い佐敷の城下町が形成された後に城下を通過するように意図的に迂回させたルートと推定され、中世期には道河内に下りると直線上にある現在の芦北高校付近で乙千屋川を渡河し「佐敷東の城」の西側麓を南下し、現在の楯橋付近で人吉方面への道を分岐したうえで佐敷川を渡河し、直線的に河谷平野を横断して五本松に向かうルートが想定される。このルートは潮の干満の影響を受けず、川の徒歩渡りが可能である。

また、佐敷峠を南東の谷沿いに下り乙千屋に至るルートの他、田浦から田浦川の谷筋を上り、大木場を経て伏木氏で神瀬への道を分岐して乙千屋川の谷を下りて佐敷東の城の西麓に至るルートが考えられる。後者は沿線に名和氏家臣や田浦氏、相良氏家臣を城主とする伝承がある田浦城・口黒城・猪山城・伏木氏城などが所在することから推定できる。因みに分岐道の神瀬へのルートには大尾田城・吉尾城がある。

「芦北郡佐敷之図」によれば、明和頃の佐敷川の河口は「船津村」付近にある。船津の地はリアス式海岸の最奥部の河口にあり、薩摩～八代の交通路にも近く、史料から窺える佐敷の津と考えられ、八代城の徳淵港と同様

に佐敷城の外港となっていたと思われる。

また、近世「佐敷町」と佐敷川を挟んだ右岸には「古町」の字名が残り、中世の城下町に推定されている（前掲「佐敷花岡城跡」Ⅰ）。しかし、「町」は水田を表す地名にも使用される場合が多くあり、城下町跡と即断はできない。史料に「佐敷之市」「佐敷八町」と見える佐敷城の城下町の位置としては、交通路の結節点でもある柵集落の南側の中世の八代～薩摩の街道沿い、または、相良氏が深く関与した佐敷諏訪神社の門前付近の人吉道の沿道を想定しておきたい。

7 中世相良氏の佐敷城の検討

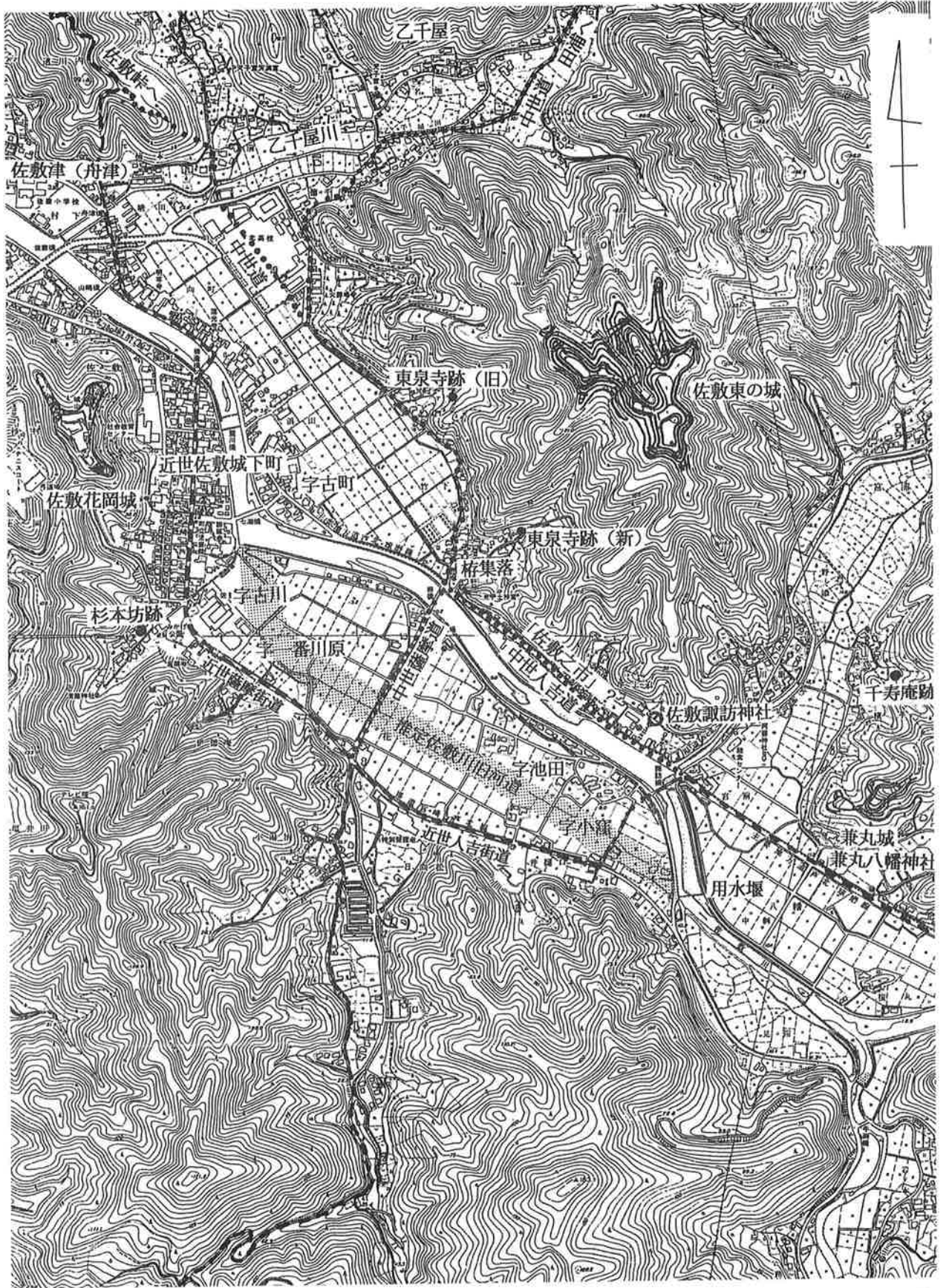
佐敷において城跡として確認されている「佐敷花岡城」「佐敷東の城」「兼丸城」の三城の城郭遺構の踏査の結果、「佐敷花岡城」は相良氏が当時多用した多重の堀切が確認できず、削平されたままの曲輪は加藤氏による所産である可能性が高く「中世城改修説」は疑問である。「兼丸城」は比高も低く、削平の弱い単一の曲輪を主郭とし、僅かな堀切によって縄張りを作る小規模な城郭で、城主の名前が江戸時代でも伝承されていない無名の城であることから本来は国人クラスの佐敷氏などの城郭であった可能性が考えられる。

一方、「佐敷東の城」は比高差 150 m の峯を主郭とし、そこから派生する尾根筋に多重の堀切を設けて厳重に防備し、かつ急峻な主郭周辺に地形を最大限に利用して複数の曲輪を確保していた。その規模は佐敷花岡城を大きく凌駕し中世八代城（「鷹峯城」、近世以降は「古麓城」と呼ばれる）に匹敵する大規模な山城であることが判明した。そして、その縄張りの特徴は中世八代城と共通した多重の堀切を多用した普請技術に因っていた（中世八代城については拙稿「中世の八代城」『南九州の城郭』第 13 号参照）。また、堀切と豎堀

を組み合わせた遺構や分布上で南限の一つとなる畝状空堀群の導入など特異な構造をもつことも判明した。さらに「佐敷東の城」は城主（城代）に相良家家臣の伝承をもち、その屋敷は本来の大手と推定される乙千屋集落付近にあった可能性も指摘した。そして柵手とみられる西側の麓には「柵」という麓集落を備え、人吉永国寺の僧によって開基と伝わる「東泉寺」や南麓には相良氏により遷宮され再興されたと伝わる「佐敷諏訪神社」があった。また、その城地は加藤氏によって「佐敷花岡城」が新規築城されるまでは八代から人吉・水俣・薩摩・大隅に至る当時の主要交通路の分岐点に直接面した交通路上の要衝にあったらしいことも指摘した。

以上の点から中世において相良氏が芦北郡経営の拠点とした「佐敷城」は、加藤氏によって作られた「佐敷花岡城」の地ではなく、「佐敷東の城」であったと断定したい。その築城の時期は、相良氏の動向から寛正元年の芦北知行の後、長唯（義滋）によって大永から享祿年間の相良家の内乱が収束して総領権力が安定した享祿三年から八代鷹峯城が築城されて三郡支配の確立が急がれた天文年間初期までの間が最も可能性が高い。遺構配置からは外縁の堀切によって区画された城域内に各曲輪群を分かつ区画施設がないので、当初の城域が天正期まで基本的に踏襲されたと考えられる。ただし、一部分に導入された畝状空堀群は堀切との切り合い関係が予想されるので改修時に導入されている可能性がある。

「佐敷東の城」は従来の国人では想定できない八代城に匹敵する大規模な縄張りを有し築城者の地域支配への強い意図を読み取れること、史料上で他国の使者との参会や球磨や八代の年行の会談場所として利用され相良氏の「役人」がいたことから、築城の実質的な主体者が相良氏であることは明白である。十六世紀第



第4図 佐敷の三城跡と歴史的環境

2 四半期の天文期は、全国的に戦国期拠点城郭・城下の出現時期であり、やがて大名を中心とした家臣団編成を成しえた築城主体者によって求心性を備えた城郭が創出されたとされる（千田嘉博「守護所から戦国期拠点城郭へ」『織豊系城郭の形成』東京大学出版会 2000）。まさにその時期に長唯（義滋）によって八代・葦北支配のための拠点城郭が築城され、整備・拡充が図られたと考えられ、戦国大名として

生き残りを図る相良氏の意図を看取することができる。

お詫びと訂正

会報第14号に間違いがありました。お詫びして訂正いたします。

112(8)頁 右の段下から16行目

誤 4 入口～曲輪監

正 4 入口～曲輪Ⅱ

城郭研究

「南郷城」を歩いて！（後編）

川元茂信

5 曲輪Ⅰ

虎口から逆に平場を曲輪Ⅰ（高城）の裾添いに30m東進すると、高さ6m程の土居と木戸口があり主郭部（本丸）の守りとしている。当時はここに「冠木門」があり、主な家臣だけが通行出来たのだろうか。また、この帯曲輪Cは広いが現在倒木や倒竹で歩けない。古老口伝では「厩屋跡」と言われていて南北30m、東西40mあると云われる。帯曲輪Cから高城へ20m登ると道は折れ、7m先に「枡形虎口」がある。曲輪Ⅰは南北50m、東西40mの広さを持つ台形状の曲輪であるが杉林で曲輪全体の地形は見通せない。曲輪の廻りを幅1m、高さ1～3mの土塁が築かれ防御している。しかし、南東の一部に崩落で土塁がなく、足元もえぐれ断崖となっているので、歩行には注意が必要である。次ぎに西方の一面に櫓跡と思われる高さ3m程の高台平場があり、ここからの眺めは格別である。南に永吉川や麓集落が一望出来、主郭空堀道を登る入城者を眼下に見下ろせる。曲輪Ⅰと曲輪Ⅱの間隔は15m程と思われるので、連絡用の橋を架けようと思えば出来たかもしれないし、その土台の可能性も多いに考えられる。

6 曲輪Ⅳ

5で報告のように、帯曲輪Cは倒木などで歩く道を見いだせなかったので「東之城（曲輪Ⅳ）」へは、Dの「大名迫」より歩く事にした。ここも途中までは道も解ったのだが、やがて倒木、倒竹などで道跡が不明となり目測で曲輪Ⅳの「東之城」を目指した。（この時、竹藪で方位磁石を紛失）杉林、段地、斜面を高所の西方へ向かうとE地点（木戸）の南側高所に着いたので尾根を降り木戸へ出た。ここで尾根は分断され通路が左右にあったので木戸を越え、道沿い西進するとF地点に降りてしまう。実は南進したことに気付かなかったのである。

後日、新たに購入した方位磁石と予備を持ちE地点から方向を確認する。先日の反対尾根方向が北西の「東之城」らしいので尾根を登る事数分後、櫓台らしき高所が確認できたので櫓台下の添曲輪を北に迂回し、高さ10m位の切岸や土塁を越えると「東之城」の曲輪Ⅳが視界に広がった。南北20m、東西40mの方形曲輪があり、西側4m下には南北20m、東西15mの平場（帯曲輪）が確認出来た。しかし、「高城（本丸）」や帯曲輪Cとの位置関



曲輪Ⅰからみた麓・永吉川

係を確認するため北側の土塁を降り、監視所らしき台場を迂回し緩斜面や土塁上を歩き、帯曲輪Cの土居を目指した。土居地点から曲輪Ⅳの方向、距離を再確認したが見通しが悪く正確さに欠けた。曲輪Ⅳに戻り下段の帯曲輪を南西部に回り込み帯曲輪Cから見えない部分を確認した。虎口と思われる遺構には「横矢」と思われる張出しが確認できたが虎口南部は崩落（豎堀）で遺構確認が出来ない。また、曲輪Ⅰから尾根が延びてきているが倒竹など障害物が多く遺構調査は断念した。この地点から下段帯曲輪の南側を土塁が延び曲輪Ⅳの櫓台跡まで延びている。途中の帯曲輪地点で高さ3mの土塁が切られ「木戸口」が南部方向に開かれているが道は確認出来ない。おそらく、E地点から南側の斜面沿いに虎口まで道があったのだろうと推測するが斜面で危険なため単独での調査は中止した。曲輪Ⅳの北側土塁はいずれも断崖に面し防備は固いが、わずかに北東側の土塁部分から切岸下の添曲輪に往来できる。ここの添曲輪に下の守護川へ降りられそうな場所があるが崩落などで確認出来ない。おそらく、ここから取水のため守護川へ降りたと思われる。この地点を尾根沿いに北東へ行くと吉利郷（吉利小学校）から「田平城」へ通ずる道にでる。さらには扇尾から古城坂を登ると伊集院へ出る。推測だが「大名迫」は、この道に通じて吉利や伊集院との連絡街道であったのかもしれない。



永吉川からみた「南郷城」

7 その他の遺構

- ① 現在、諏訪神社のある「上城原」にも土塁や削平地（曲輪）と思われる遺構がわずかに残っており、この地より「大名迫」附近に出る道が尾根続きにあり、昔は通れたと住民の方に聞いた。
- ② 稻荷山の東に「大名井戸」があり殿様が飲む水であるとする、この場所から50m西方に一条の道が北方に延び、今は使われていない様であるが途中は空堀となり「高城（本丸）」方向に延びている。新道が出来て遺構が不明であるが住民は城への道は麓から何条もあったと云う。近世の話であろうが「稻荷山」が城跡であれば推察できる。なお、城山入口A地点から南方へ尾根伝いに稻荷山へ行くことが出来る。
- ③ 「大名迫」がこの地よりどこへ続くのかわからないが、日置北郷（吉利郷）領地から「田平城」（日吉町）を通り、「古城」（松元町）、「一字治城」（伊集院町）へとつながるならば伊集院氏分流である南郷桑波田氏の動勢が推察出来る。また、「深固院」など石屋和尚（伊集院家）の布教活動が伊集院氏の支配勢力圏と重なってくる。なお、大名は後世の呼び名か。

8 終わりに

自分が南郷城を歩いた時の様子や曲輪Ⅰ、Ⅱ、Ⅳに関する遺構などを主に記録、発表しまし



本丸「高城（曲輪Ⅰ）」の北側土塁



㊸地点の土居

たが、まだ、調査など半ばであることをご承知して頂きたい。倒木や竹などの障害物で測量など正確さを欠いてしまった事、未踏破地が残っている事、城域の区分が明確で無い事、外城の調査が未熟な事など挙げればきりが無いが、長期に渡りこれからも調査して行きたいと思う。しかし、早急に調査を行う必要性も身に感じている。城域西端部の「野頸城」「監視所」「浸食谷」などは開発や埋め立てで遺構は失われ跡を留めていない。

また、「城主桑波田氏」や「南郷城」に関する記録、文書が少なく推測部分が多いなど不確定な部分が多い様なので資料の発掘も併せて行って行きたいと考えている。

なお、縄張り図作製や記録にあたり以下の機器を使用した。

デジタルカメラ	FUJIFILM FinePix 600Z
カメラ	コニカ Z-up 140LX
距離測定	LYTE SPEED 400
方位磁石	2個
他	記録用ノート
	地形図(吹上町全図其1 1/10,000)

最後に「南九州城郭談話会」の見学会風景や私が散策した山城の事を掲載したホームページを開いております。アクセス・アドレスを明記しておきますのでご覧頂き、ご意見や情報をメールにてお願い致します。

URL <http://www.satsuma.ne.jp/myhome/kawamoto/>
 メール kawamoto@ml.satsuma.ne.jp

(注) 文中での「土居」は、土塁の中でも単一的や部分的に用いられ、単方向に対する防御壁を著している。

史料

- ① 『県史料旧記雑録』（内裏大番役支配注文）
 建久八年十二月廿四日（1197）の内裏大番薩摩国参観人名に南郷万楊坊の名が登場する。また別書「国人交名」には日置南郷桑波田万楊房覚弁とある。
- ② 伊集院郷土史
 嘉元2年（1302）3月2日の譲状で、紀ノ景氏が先祖相伝の桑波田郷を子息桑波田四郎三郎に譲渡している。
- ③ 御家五代他家古城主由来記写本（薩隅日古城主由来記）正徳6年（1716）出版
 「南郷永吉の地」南郷万楊房覚弁略…太守勝久公の家老桑波田讃岐守景元入道観魚が先祖也。
- ④ 『西藩野史』
 新薩藩叢書（二）卷之九 166頁 171頁
- ⑤ 『薩隅日地理纂考』 四之卷 125頁
 薩摩国の永吉郷 「南郷城」より。
- ⑥ 吹上町歴史資料館 掲示
 桑波田氏歴代系図より。
- ⑦ 常楽院沿革史 124頁
 天文二癸巳（みずのとみ）の春薩州日置郡南郷城主桑波田孫六貴久公の仇敵島津実久に興みし …略… 番人謀れたりとは知らず更に怪しむ所なし。
- ⑧ 吹上郷土史 中巻
 第三節 伊作城の十三年
 （二）南郷及日置の征服 30頁

◆◆ 第15回見学会・例会報告 ◆◆

出口 浩 二

見学会

平成12年5月14日(日)午前10時高山町文化センターに集合、町のマイクロバスや自家用車を連ねて高山町教育委員会の新福氏の案内で高山城へ出発した。参加者約75名であった。

高山城は鹿児島県肝属郡高山町のほぼ中央部に位置し、北を木佐貫川、南を本城川、西を高山川の三川によって囲まれ、東側は国見連山からの支脈を空堀によって区切っている。

曲輪・空堀等の良好な残存状況やその歴史的重要性から本県では最も早く昭和20年2月22日国指定史跡となった。推定面積171,857㎡である。

新福氏の案内で大手道から入り、大来目神社のある北西の小曲輪、狭小な大手門を抜けて南側の二之丸、北側の山伏城・枳形城、そして東奥の本丸を見学した。本丸は城跡最高所(82m)に位置し、広々とした面積を有していた。東西2段からなり、西側は虎口が中央に開いているため南北に2分されている。曲輪の北側縁辺部から東側、南側にコ字状に1.5～5mの土塁が巡っていた。

その後、北側の馬乗馬場を隔てて、東西に並ぶ奥曲輪を見る。東端の曲輪は南北朝初期南朝方として活躍した楡井頼仲が一時的に拠った楡井城ともいわれている。

今回の見学会のために、草藪など切り払われ、



高山城本丸にて(5月24日)

見学路が良く整備されて、順調に回ることができた。当局の配慮に感謝の限りである。

天正2(1574)年肝属兼亮は島津氏の軍門に降り、高山城は廃城となった。その後425年高山城は中世の気をそのままに、まるでタイムスリップしたかの如くに21世紀にその全貌を現そうとしている。

例会

高山町文化センター会議室で午後1時から3時30分まで開催された。三木会長と高山町教育委員会堀口温郎教育長の挨拶の後、橋口巨氏の司会で発表が始まった。

1. 高山城跡 新福深氏(高山町教育委員会)

高山城の保存・整備について近年の経緯と問題点、排水関係やシラスの崩落、さらに今後の基本計画等について。

2. 高山城の歴史と縄張構成

三木靖氏(鹿児島短期大学学長)

指定範囲外にある家臣団の屋敷地・三之丸の取り扱い、築城年代、明応3(1496)年と永正(1506)年の島津勢の高山城攻めの可能性、北原文書による大永4・5(1524・25)年頃の高山新城への移動等について。

3. 群郭式城郭—都城盆地を中心とした事例から— 稲丸雅文(鹿児島大学大学院)

シラス台地と群郭式、拠点的城郭としての機能—軍事性と居住性等について。

4. 大隅町日輪城(恒吉城)跡の出土遺構・遺物

佐藤亜聖・宇田員将(奈良元興寺文化財研究所)・清水周作(大隅町教育委員会)城の利用期間・鉄砲玉・炉状遺構等について。

その後、3県の城館調査の動向の説明が、宮崎県若山浩章氏、熊本県鶴嶋俊彦氏、鹿児島県上田耕氏からあり、最後に三木会長が総括を行い今後の会活動の指針を説明された。

出版物のご案内

機関誌『南九州城郭研究』創刊号 残部僅少!

購入希望の方は、下記手続きをお願いします。

- ・最寄りの郵便局において代金1,500円(非会員は1,800円)を「口座番号01760-3-84609, 南九州城郭談話会」までお払い込み下さい。確認次第、創刊号を送付します。なお、送料は当方で負担します。

・問合先

〒899-5421

鹿児島県始良郡始良町東餅田498番地
始良町歴史民俗資料館 気付

下 鶴 弘

TEL 0995-65-1553

FAX 0995-66-5820

【新入会員】

(8月1日現在)

江藤 速雄

日和佐宣正

事務局便り

◎機関誌『南九州城郭研究』第2号

9月下旬刊行

- ・鶴嶋俊彦「中世八代の城郭と城下」
- ・高田 徹「泗川倭城について」
- ・上田 耕「南九州の拠点城郭の一例」
- ・川元茂信「南郷城と桑波田氏」
- ・下鶴 弘「帖佐宇都御屋地跡について」
- ・五味克夫「菱刈本城城主考(補正)」
- ・若山浩章「研究ノート 都於郡城覚書」他

編集後記

◆第15号をお届けします。今号には、鶴嶋俊彦・川元茂信両氏のそれぞれの後編を掲載しました。感謝申し上げます。

◆先日の8月5・6日、東京駒澤大学で開催された全国城郭研究者セミナーに、初めて参加しました。全国から集まった多数の研究者、詳細な発表、活発な意見、現在までの研究の到達点を示す集いに圧倒されました。これをぜひ南九州の城郭研究にも生かしたいと思う今日この頃です。

◆次号の会報発行は、11月上旬の予定です。原稿は下記まで。

(Shige)

重久淳一

〒899-5106 始良郡隼人町内山田1138-5

第16回 見学会・例会案内

日 時 平成12年11月12日(日)
10:00～15:00

集合場所 西都市中央公民館
(宮崎県西都市)

交通案内 ・JR日豊線日向新富駅より13km
・西都市歴史民俗資料館隣り

会 順 (1) 見学会

10:00 集 合

10:10 都於郡城跡見学

12:00 昼 食

(中央公民館)

※ 希望者は弁当を受付けます。

(2) 例 会

15:00 解 散

お知らせ

◆小西行長公没後400年記念事業

シンポジウム「小西行長の実像にせまる」

- ・平成12年10月1日(日) 9:30～16:30
- ・宇土市民会館(熊本県宇土市新小路町)
- ・問合先 宇土市文化振興課0964-23-0156

南九州の城郭 第15号

発行所 鹿児島県川辺郡知覧町郡17,880

ミュージアム知覧内 上田耕気付

南九州城郭談話会

(振替口座 02040-6-7850)

発行者 三 木 靖

編集者 重 久 淳 一

印刷所 (株)ト ラ イ 社

入会金500円 年会費1,000円